目次

序章　水になれ　香港人たちの新しいデモの形 ―― 7

顔が見えない黒装束の集団／
突如始まった「犬の鳴き声大会」／
デモの新しい形／
私たちは「夢遊病者」です／水になれ

第一章　二〇一四年「雨傘運動」の高揚と終息 ―― 25

非暴力で七九日間の占拠を行った雨傘運動／
英国海外市民パスポート／雨傘運動が起こるまで／
タンクマンには絶対なれない／貴金属店とドラッグストア／
「我要真普選」／催涙弾のコツ／旺角のストリートのシド・ビシャス／

ガンダムマニア／迷走する雨傘運動　立法会突入と政府庁舎包囲作戦／
ＩＤ表示のない警察官／金鐘現場の撤去当日／最高齢の逮捕者

第二章　未来のために戦う香港　二〇一九年デモ

二〇一九年七月一日、香港の風景／今日は、勇武派になるかもね／
デモ隊の立法会突入／「和理非」の参加者たち／
死を覚悟したデモ隊／「香港人闘争宣言」／香港警察のシナリオ／
突入したデモ参加者たちの出国／本土派たちの躍進／
二〇一六年の７・１デモ　本土派の戦略の原点／
劉慧卿民主党代表と面会／本土派たちの危険な呼びかけ／
本土派の言い分／本土派が排除された議会

67

第三章　デモの主力・学生たちの戦い

デモ隊は暴力学生なのか／デモが続き、傷ついていく香港／
地下鉄、飲食店、銀行などの破壊行為／
雨傘は兄が戦った。今度は、ぼくの番だ／黙ってしまった少年たち／
祖父は親中派。夏休みはデモ漬け。私はそれでも戦う／

107

通識教育科（リベラルスタディーズ）、香港型ゆとり教育がデモ隊を生んだ？／
未来を切り拓く思考の訓練／
リベラルスタディーズがジョシュア・ウォンを作った／
学生たちのリクルート問題

第四章　市民たちの総力戦　139

警官隊を押し返す市民の力（旺角の現場から）／地下鉄駅入り口の市民葬／
破壊活動で暴かれた政府の嘘／デモの現場で見た、市民たちのサポート／
デモ最前線の女性たちの活躍／
香港のおばさん vs. 警察官／港女たちの最前線／女性の社会進出を支える存在／
在日香港人たちの戦い／香港人の涙

第五章　オタクたちの戦い　171

香港のオタク文化／「進撃の巨人」と香港の若者／
雨傘運動は「コードギアス 反逆のルルーシュ」だった？／
「ちびまる子ちゃん」と「ポケモン」の広東語アイデンティティ／
香港ネット民たちの戦い／オタクの勇武派／

アイドルのDVDで士気を高める／逮捕時に失神するデモ隊／
オタクはクールな文化／そびえ立つ中連弁／
政治を動かしつつあるオタクたち

第六章　敵たちの実相 ―― 205

香港の警察はいつから、変わったのか／追いつめられる警察／
市民みんなが敵に見える警察／分断される香港／
白T軍団による元朗事件の真相／東京・千鳥ヶ淵での中国人との激突／
中国人たちに話を聞いてみた／「自由」を求める中国人留学生／
日本で香港人がデモをするということ／香港が好きな中国人留学生

終　章　周庭（アグネス・チョウ）の二〇一九年香港デモ ―― 237

ユーチューバー・周庭の発信力／逮捕三回と選挙資格剝奪／
日本との絆／運動を続けていける力／日本のサブカルチャー／
周庭はなぜ戦い続けることができるのか

あとがき ―― 253

2019年6月21日19時頃　デモ参加者にオキュパイされた金鐘の路上

序章

水になれ
香港人たちの新しいデモの形

顔が見えない黒装束の集団

地下鉄の車内にいる乗客が、いつの間にか黒Tシャツの若い男女ばかりになっていることに気がついた。中には黒キャップに黒マスクまでつけている黒ずくめも珍しくない。尖沙咀（チムサーチョイ）駅を出発した地下鉄荃湾（チュンワン）線は、九龍（クーロン）半島から香港（ホンコン）島まで海底トンネルを通る。その多少長めの走行時間、車内には少し息苦しいような独特の緊張感があった。本来、香港人は地下鉄でも周囲にお構いなしに、携帯電話で話したり、友人と大声で話をするのだが、この車中では誰もそんなことはしない。香港とは思えない沈黙が支配し、みんなスマホを凝視していた。地下鉄が金鐘（アドミラルティ）駅に着くと、示し合わせたように、黒い若者たちはみな降りていった。もちろん、私も彼らの後に続いた。

香港島の金鐘には、日本の国会にあたる香港立法会の庁舎がある。その前を通る六車線道路の夏慤道（ハーコートロード）は、この日、六月二一日の夕方からバリケードで封鎖され、デモ隊である黒いTシャツ姿の若者たちが道路上に集まり占拠（オキュパイ）を始めていた。少し歩いた政府庁舎の階段脇の壁には、ポストイットに市民がそれぞれ思い思いの言葉を書いて貼っていく、レノンウォール（連儂牆）も出現していた。「反送中」「民主」「自由」などの言葉が並ぶ。駅の出口では人々にマスクやペットボトルの水などを配るデモ参加者もいた。

政府庁舎の外階段に出現した雨傘運動以来のレノンウォール

二〇一四年の普通選挙を求めて立ち上がった雨傘運動の光景と同じものが目の前に再び現れたのだ。このところの香港は、雨傘運動を敗北の記憶として、無力感が支配しているようだった。民主化運動もどこか停滞気味で、市民は政治への失望感から、このまま中国に呑み込まれていく時代の流れに、身を任せるかに思えた。しかし、二〇一九年六月九日、一〇三万人（主催者発表）の市民が街頭に出てデモ行進を行い、香港政府の逃亡犯条例の改正案に明確にノーを突きつけた。逃亡犯条例への反対という一点で、再び市民は立ち上がったのだ。

だがすぐに、雨傘運動とは雰囲気が少し違うことに気づかされた。前述の通り、まずは参加者の服装だ。今回の参加者はみな黒いTシャツといった、全身黒のコーディネートがドレスコ

ードとされている。また、一様にスマホを凝視しているが、その表情はどこか硬い。二〇一四年の雨傘運動の占拠の現場では、黄色が運動のイメージカラーで、みな思い思いのファッションをして現場には笑顔があったと記憶している。スマホを持つ参加者も多かったが、その目的はテントの中の時間潰しの動画視聴だったり、友人とのおしゃべりやSNSをしたりと、どこかのんびりとしていた。私のような外国人を見つけると積極的に雨傘運動の説明をしてくる参加者もいた。もちろん、みんな笑顔で話しかけてきた。一方で、この場にいる黒い集団は、常に若干の緊張感を漂わせている。

香港警察の本部庁舎がある方向から拡声器の声がした。道路上で何か集会が始まったらしい。声の場所に向かった。これより一〇日程前の六月一二日、香港警察は催涙弾やゴム弾などの武器を大量に使って、立法会に押し寄せてくるデモ隊の鎮圧を行い、多くの怪我人(けがにん)を出し、市民の恨みを買っている。マイクを持った発言者の言葉に、若い参加者たちは同意して鬨(とき)の声をあげていた。発言者も周囲の参加者も学生が中心のようだ。「黒警、黒警」(ハッゲィン、ハッゲィン)とのコールもある。ヤクザ警察、という意味だ。集会は熱を帯びているようだ。

その光景にスマホのカメラを向け、二度程シャッターを切ったとき、マスクで口元を隠した黒ずくめのデモ参加者たちに囲まれた。早口の広東(カントン)語でひとしきり怒鳴られ、「ソーリー、アイム、ジャパニーズ、ジャーナリスト」と言う私に、「ノー・フォト! ノー・フォト!」と、

画像を削除するように迫られた。私は自分のことを、今回のデモを日本に伝えるために来たと説明し、雨傘運動のときから取材をしていることをつたない英語で伝えた。すると、日本語を勉強していると思われる学生が出てきて、私に、日本語で話してくれた。

「日本から来てくれてありがとうございます。でも、参加者の顔は絶対にダメです。お願いします」

日本の取材の現場ならば、警察に言われようが絶対に突っぱねる私だが、彼らの切羽詰まったような表情に同意せざるを得ず画像を削除し、彼らにも確認してもらった。

突如始まった「犬の鳴き声大会」

同時刻、ここからほど近い警察本部には、すでにデモ隊がいた。数千の黒いTシャツの抗議者たちが何重にも警察本部を囲んでいるのだ。「黒警、黒警」のコールがしばらく続いたかと思うと、「黒社会、黒社会」（ハッセイオー、ハッセイオー）のコールもある。警察が暴力を振るうゴロツキだとデモ隊は言いたいのである。他にも何やら、すごい言葉が出ているようだ。合流した香港人の日本語話者に聞いたが「日本語にはないです」と言われた。すさまじいスラングのようだった。「狗警」の声もあがると、デモは一斉に、犬の鳴き声大会となった。「ウォーン、ウォーン」「ワオワォ！」やたらリアルな犬の声には、笑い声が起こった。警察本部の中

からは、ガラス越しに警官が群衆を見つめていた。そして、ときおり盾を持ったフル装備の警官が出てくると、レーザーポインターが当てられたり、さらには生卵もぶつけられたりし、しばらくすると、なす術もなく中に戻っていった。

デモ隊は、現在「暴徒」として逮捕されている学生たちの解放を要求していた。六月一二日に発生した立法会前の警官とデモ隊の激突では、怪我をしたデモ隊が病院で治療を受けた後に逮捕されるケースが相次いだのだ。

デモは夜まで続き、雨傘運動を煽動した罪で服役し、この四日前に出所してきたばかりの黄之鋒（ジョシュア・ウォン。元・学生団体「学民思潮」〈スカラリズム〉、現・新政党「香港衆志」〈デモシスト〉メンバー）が現場に到着して、マイクを持って話し始めた。また、つい数日前まで日本にいた、「民主の女神」と呼ばれていた周庭（アグネス・チョウ。元「学民思潮」、現「香港衆志」メンバー）も来ているという。あの雨傘運動の役者たちも、この場に揃ったようだ。

この後の展開が気になったのだが、通訳を担当してくれた人は「ここまでしかいられない」という。私は今回の取材で香港に到着したばかり、取るものもとりあえず、現場に急行していた。すでに終電近くであり、私はその場を離れざるを得なかった。その後、ホテルで現場のネット中継を見ていると、この日のデモ隊は撤収を決定すると、早々にみんなどこかに散らばっていったようだった。先程マイクを取ったジョシュア・ウォンが撤退を呼びかけたのだろうか。

翌日の金鐘は、前日のオキュパイが嘘のように日常を取り戻していた。六車線の道路には車が往き来しており、警察本部の前にも黒いTシャツ姿の集団はいなかった。ただ、デモ隊が書いたと思われる落書きだけが残されていた。

この日は、目立った動きはなく、香港の街は何事もなかったかのように、いつもの大陸からの観光客などが路上に溢れていた。警察本部前を封鎖したデモ隊は、なぜすぐに引いたのか。現地の報道を見ても、今一つはっきりとしない。

デモの新しい形

ここまでの経緯を簡単にまとめる。デモの引き金になったのは、犯罪者を外国に引き渡す「逃亡犯条例」の改正である。この条例改正が実現すると、中国・北京政府が犯罪者と認めた香港人、外国人を香港で逮捕することができるようになり、そのまま中国に送ることが法律上可能になる。市民は猛反発し、条例改正反対の大規模デモに繋がった。六月九日のデモで一〇三万人の参加者が通りを埋めつくした。

一二日には立法会で審議入りする逃亡犯条例に対して、市民に立法会への「ピクニック」が呼びかけられた。このピクニックは隠語であり、実際は抗議デモだ。無許可デモとなってしま

うために、それぞれの参加者は自発的にピクニックと称して、立法会近くの公園や、立法会前の広場や近くの道路上に数万の人々が集まったのだ。そのデモ隊の一部、完全フル装備の勇武派が警官隊と衝突した。警官隊は催涙弾で応戦して、それでも引かないデモ隊には、ゴム弾などの低致死性の銃器を使用した。結果、デモ隊が血まみれになる映像はすぐさま世界に配信された。

立法会は囲まれてしまい、立法会議員は議場に入ることができず、審議入りの延期を余儀なくされた。結果、「逃亡犯条例は棚上げする」と、一五日には政府発表があった。市民側の動きは、政府へ追い打ちをかけるように、一六日には、二〇〇万人（主催者発表）が参加した香港史上最大のデモが挙行された。これは、香港市民の四人に一人が参加した計算となる。

このデモを受け、香港行政長官の林鄭月娥（キャリー・ラム）は一八日に会見し、市民に「社会的な混乱を招いた」として陳謝した。ところが、改正案の撤回だけはしなかった。そのために二一日には、行政長官に抗議するため、冒頭の政府庁舎前の占拠と警察本部の包囲による抗議デモが発生したのだった。

「五年前の雨傘運動とは明らかに違う。今回は、明確なリーダーがいない。そのため、烏合の衆となる危険性がある」

香港の研究者、取材者たちの間では、一〇三万人デモの後、実は、こうした懸念が語られて

いた。雨傘運動には、大学の自治会の連合会である「学連」（香港専上学生連会）の周永康（アレックス・チョウ）や、「学民思潮」のジョシュア・ウォンというようなリーダーと呼べる存在がいた。しかし、今回は、そういった名前を出して先頭に立っているような、明確なリーダーが存在しないのだ。

実際に、雨傘運動でのリーダーたちは、投獄されており、ジョシュア・ウォンなどは、一七日にやっと出所してきたばかりだった。統制が取れない集団は、容易に暴徒となってしまうのだろうか。

私たちは「夢遊病者」です

雨傘運動以来、取材をしている伝（つて）を頼って、この「リーダーがいない革命」の当事者たちに話を聞くことができた。九龍地区の商業ビルの一室で会った二人の若者、A君（二三）とBさん（三六）だ。理系の大学生と、金融関係の会社員という二人の属性を見ただけでも、学生や政治団体などの組織の枠組みでの活動でないことは明らかだ。ちなみに、雨傘のときは「二日程現場に行っただけ」（A君）、「物資班の方を少し手伝った」（Bさん）という程で二人は熱心ではなかったという。だが、現在、彼らがデモで集める人数は二〇〇～三〇〇人にも上る。

「確かに、そのくらいの人数はいますが、すべて把握している訳ではありません。絶対に信用

できるコアメンバーの二〇人くらいが常時連絡を取り合って、後は、そのメンバーが何かの活動をするたびにそれぞれ集めたりしているのです」（A君）

きっかけは、A君が香港高登討論区（日本の2ちゃんねるにあたる香港のネット匿名掲示板）で、今回の条例改正について書き込みをしたことだった。

「激論が交わされた結果、有志と一緒に何かやらねばと思って動いたんです」（Bさん）

五月頃から、チラシを作成して街頭で配布するなどの活動を自主的に始めたのだという。そこに強力な武器が登場する。

「連絡はテレグラムを使います」（A君）

彼らはロシア製の暗号化アプリ、テレグラムで連絡を取り合っているという。このアプリは、通信内容が高度な暗号化技術で保護される上に、削除されると復元が困難になる。当局による監視の目を逃れて、後の訴追を避けるためだ。

「それも絶対に信用がおける人間だけが重要な情報にはアクセスできるように、階層を設定するのです」（A君）

彼らは街頭でのチラシの配布活動さえ、口元にマスクをつけて行う。みなが顔出しで活動をしていることが当たり前だった雨傘運動のときとは、今回は状況がまったく違うのだ。もちろん、金鐘の路上で会った抗議者たちと同様、彼らにも取材にあたっての顔写真は拒否された。

「雨傘のときは現場以外での逮捕はありませんでしたが、旺角（モンコック）の事件以来、ずっと経ってから逮捕されるようになりました。顔と名前を特定されることは大きなリスクです」（Bさん）

雨傘のときには、学生たちのグループが思い思いの組織名入りのTシャツを揃えていたり、自らのグループとしてのアイデンティティを持って活動していたのだが、彼らは名前すらないという。

「便宜的に使っている呼び名のようなものはありますが、対外的に名乗るような名前はありません。そういった必要もないからです。さらに言えば、リーダーもいません。元々、私が声をかけてネットを介して集まったのですが、私はリーダーというよりは、コーディネーターですね」

目の前でそう語るA君に、ジョシュア・ウォンのように、マイクを持って市民に訴えるような熱っぽさはない。理詰めで話すのが印象的な理系男子だった。

彼らは雨傘運動のときには存在していなかった、今回の運動を支える、顔もない、名前もない、頭（リーダー）もいないグループなのだ。

「旺角の事件などのように、暴動罪で逮捕されると数年から最高禁錮一〇年の罪に問われます。これで警察は市民の政治活動さえ抑え込もうとしてきたのです」（Bさん）

彼が繰り返し言う「旺角の事件」とは、二〇一六年の旧正月の二月八日深夜、屋台の取り締まりに端を発して、本土派の学生活動家などが起こした旺角騒乱と呼ばれる事件だ。投石に放火とエスカレートする学生たちに、警官は威嚇のため実弾を発砲した。この暴動の首謀者として、「本土民主前線」の梁天琦（エドワード・レオン）は、暴動罪で逮捕されてしまい、現在も服役中である。この事件以降、過激な抗議活動への市民の反発も起こっていた。

だが、ここにきて実力行使を伴う抗議活動に対して、市民の認識も変わってきたようだ。今回の逃亡犯条例反対デモでは、六月九日の一〇三万人デモの終盤でさえも、勇武派と呼ばれる実力行使を行う黒ずくめのデモ隊が警官隊と激しく衝突していた。そして、一二日の立法会前での抗議では、実質的に立法会を包囲し騒乱を起こした勇武派による実力行使によって、その審議入りを止めたのだ。市民たちは、勇武派に期待するようになっていた。

警察はそうした過激な抗議活動に対して、確実に潰しにかかっていた。

「ネット上で一二日の呼びかけを行った人物はデモの前夜に警察に逮捕されたと聞きます。暴動を呼びかけたということで。だから、今現在は、みんなネットの書き込みにさえ『〇〇で警察を見た』ではなく、『〇〇に警察がいる夢を見たんだが』というような現実ではない報告の形にしています」

そう語るA君たち参加者も「私たちは『夢遊病者』です」と、この状況を自嘲する。「夢で

2019年6月21日21時頃、デモ隊に包囲された警察本部

見たんだが、○日は××で抗議をするといいのではないか」「私は○○でも同時にやるような夢を見た」などの書き込みで議論がされているという。もはや笑うしかないが、これは警察とデモ隊の逮捕要件をめぐる知恵比べの様相だ。

テレグラムは今回のデモで大きな役割を担っているという。「○○が足りない」「××で怪我人が出た」などの最新情報も複数の掲示板を使い分けて、即時にやりとりされる。一見、小さなグループと個人ばかりが参加して無秩序に見えるが、その小さなグループがテレグラムを介して、全体としての決定に従って動いているというのである。

「二一日の警察本部前での抗議活動も、警察署を囲むということを実行しようというのは、三○分程前にネット上で決まったのです。現場に

行っても、次に何をするのか、私たちでさえ分からないのです」（A君）

これが、デモの現場で参加者たちが一様にスマホを凝視している理由だった。実は、二一日の深夜、警察署を囲んだものの、撤収するかどうか、現場は迷っていたという。そのときの決定のプロセスを、A君はこう語る。

「ジョシュア・ウォンがマイクを取ってこのまま包囲を続けるのか、それとも撤収するのかを群衆に聞いたんです。それでも、結論は出なかった。結局、撤収することは、テレグラムの方で決まったんです。やっぱりリーダーは必要ない」

A君自身は、本土派（中国が本土ではなく、香港こそが本土であるという、香港本位の立場を取る、雨傘運動以降に台頭してきた新しい民主派勢力）を支持している。自決派（香港のことは香港で決めるという民主主義の理念に基づいた立場を取る民主派。旧来の民主派と本土派の中間的な立場でもある）と呼ばれる雨傘運動のリーダーの一人であったジョシュアに対してはあまりいい感情を持っていないらしい。それでも、確信をもってこう語った。

「私は組織や団体を作ってリーダーを生み出すことを警戒しています。結局、リーダーが登場すると、その人物によって人が集まるかも知れないが、離れていく人もいる。今回のように、逃亡犯条例という一つの事件でまとまる方が、うまくいくのです。今回の運動にリーダーは必要ないと思います」

二〇一四年の雨傘運動は、残念ながら、何の成果もなかったと言われている。だが、確かなのは、A君のような、一人一人が自分で考えて行動を起こす、多くの若者を生み出したことだ。その精神は引き継がれて、活動方法は確実にアップデートされている。

水になれ

最後に今回の運動でのキーワードを聞いた。

「水になれ、です」――そう言われて戸惑っていたら、Bさんの答えは、我々日本人もよく知る人物名だった。

「ブルース・リー（李小龍）の言葉ですよ」

心を空にしろ
水のように形をなくせ
水はカップに入れたら、カップに
ボトルに入れたら、ボトルに
ティーポットに入れたら、ティーポットの形になる
水は流れ続け、激流にもなる

友よ、水になれ。

ブルース・リーはもちろん、香港が生んだ英雄である。日本ではカンフー映画ブームで記憶している人が多いと思うが、彼はワシントン大学で哲学を学んで、多くの哲学的な言葉を残している。そんなブルース・リーの言葉“Be water”（水になれ）は、今回の運動の象徴的な言葉として、すでにTシャツなどに書かれ、戦術的なスローガンともなっているのだ。このことから今回の反送中デモは一部で「水革命」とも呼ばれている。

「水になれ」

これは強い。小規模なグループがゆるやかに連携しながら、時に集まり、時に分散し、持続的な活動を続けていくのだ。雨傘運動のような長期的な占拠という手段は使わない。市民生活を続けながらも、警官隊とは激しく対峙（たいじ）し、政府への抗議を続けていく。そんな抗議者は「水」なのだ。いつもはおだやかに流れているが、いつでも形を変えて、時に激しく、すべてのものを押し流す。

今回の運動は、これからもいろいろと形を変えて流れ続けるのだろう。いつの日か、この香港市民の奔流は自由を手に入れるのではないだろうか。

今回のデモで現地に足を運んだ最初の取材で、私は大きな確信を得ることになった。

本書で扱う香港デモの現在までの動きは、こうまとめられるだろう。

――二〇一四年九月に始まった行政長官の普通選挙を求めた民主派市民による香港中心部を占拠した雨傘運動は、結果を残せないまま七九日間で終息した。その後に行われた二〇一六年の立法会選挙では、雨傘運動に参加した若者たちが当選したのだが、当局によって彼らは資格剝奪された。当局の抑え込みに対し、例年行われる民主派によるデモでは参加者が減少し、民主化運動はしばらく鎮静化した。二〇一九年に入り、刑事犯を中国本土に送致できる逃亡犯条例の改正案が立法会で審議入りする際に、反対する香港市民によって、六月九日に一〇三万人が参加するという大規模デモが発生した。警官隊との衝突も頻発し、デモは過激化していき、七月一日には立法会への突入、八月には香港国際空港の閉鎖が発生した。警官隊とデモ参加者は激しく対立し、催涙弾と火炎瓶が飛び交う混乱で、市内ではデモ参加者による破壊行為も行われた。一一月、デモの過激派の拠点とされる二つの大学に対して警察が包囲戦を行い、大量の逮捕者を出した。その一方で、一一月二四日の区議会議員選挙では、民主派が地滑り的な大勝利を収めた。大規模な衝突は少なくなり、二〇二〇年に入り、新型コロナウイルスの脅威が香港にも忍び寄る中、大規模デモは行われず、収束したかに見える――。

こうした出来事は新聞などを読む人たちには既知の事実かも知れない。だが、本書で私が伝

えたいのは、デモの参加者たちの表情であり、涙や怒りだ。私は香港人たちの自由への渇望に心揺さぶられながら、ずっと取材していた。本書で、香港の歴史的事実の行間をお伝えできれば幸甚である。